

形容詞類の連体修飾にみられる連用的意味について

神崎 享子 井佐原 均
早稲田大学 郵政省通信総合研究所

1 はじめに

連体修飾語句は、形容詞、形容動詞、連体詞、「名詞＋の」、テンスを失った動詞の過去形など、品詞を越えて様々であるが、本稿では、連体という用法が語の意味にどのように影響するかを探るため、それら連体修飾語句の意味的なかかり先を考察する。現時点では、形容詞、形容動詞を中心に、それと類似するような状態性の「名詞＋の」の一部や連体詞なども含め¹調査をすすめている [神崎, 1997]。

連体修飾関係にみられる形容詞類と名詞との意味関係は多様である [高橋, 1994]²。その中には、構文的には形容詞類が名詞を修飾しているが、意味的には名詞の指示対象自体にかからない場合がある。例えば、「美しい花」は、意味的にも「美しい」は「花」それ自体の美しさを表しているが、「(イリオモテボタルは) 公式には純粋なホタル科ではなく～」という例の場合は、ホタル科それ自体が純粋なものではなく、イリオモテボタルのホタル科であるあり方が純粋であるという、解釈になる。本稿では、形容詞類が名詞の指示対象自体を対象にして表すのではなく、後者の例のように「『名詞の指示対象』である」あり方について表す場合を中心に分析する。分析対象となるデータは、多分野にわたる 100 冊の書籍から作成したコーパスから抽出した。

2 分析方法

連体修飾関係を結ぶ形容詞類と名詞のうち、意味的に形容詞類が共起する名詞それ自体を対象にして修飾しているか、あるいは、名詞それ自体を対象にしていなかったかを判断するため、形容詞類の連体用法から叙述用法への「転換」が可能かどうかを判定する [佐久間, 1967; 寺村, 1991;

橋本, 1992]。例えば、前掲の例で

(1) 美しい花

は、「花が美しい／その花は美しい」のように叙述用法に転換できることから、「美しい」は「花」それ自体を修飾していることがわかる。一方、

(2) (イリオモテボタルは) 公式には純粋なホタル科ではなく～

という例の場合は、「ホタル科が純粋だ／そのホタル科は純粋だ」と表すことができない。「純粋な」は、意味的には、「ホタル科」それ自体にかかっているのではなく、イリオモテボタルのホタル科であるあり方が 100 %であることを表している。

このように、叙述用法に転換できるか否かによって、形容詞類が意味的に名詞の指示対象それ自体を対象にしているか、あるいは、名詞の指示対象それ自体ではないか、ということ判定する。

3 連体用法のみ成立する形容詞類と名詞との意味関係

叙述用法への転換の可否を手がかりに、連体用法のみ成立する場合の形容詞類の意味的なかかり先が名詞の指示対象それ自体ではないとすれば何にかかるとかを分析する。

連体用法のみ成立する場合、形容詞類は名詞の指示対象それ自体を対象とせず、名詞の指示対象がもつ内的な意味特徴にかかる場合と、名詞の指示対象のおかれている状況など、名詞の指示対象をめぐる外的なことにかかる場合とがある。

まず、形容詞類が名詞の指示対象のもつ内的な意味特徴にかかる場合について述べる。

(3) じゃがいもは古い昔から食べられていたわけではない。

¹ これらを仮に「形容詞類」と呼ぶ

² [高橋, 1994] では主に連体修飾語句を対象にして、被修飾語の名詞との意味関係を詳しく分析している。

(3)の例は、「昔」が表す「かなり以前の過去」という意味と、「古い」が表す「かなり以前である」という意味とが「時間的にずっと以前」という意味特徴の点で重複している。「昔」と「古い」の意味特徴が重複しているため、この場合、「昔は古い」のように叙述用法にして「昔」を直接、対象にすることができない。

(4) 彼は錬金術と占星術の異常な愛好者で～

(4)の例は、「愛好者」という意味の一部「愛好性」という意味特徴を強めているものであり、「愛好者」本人が異常なわけではないので、人が異常であるという解釈の叙述用法「愛好者が異常だ」には転換できない。

(3)、(4)の例は名詞の指示対象のもつ意味の一部に対してかかっているが、次のものは名詞の指示対象の内容に対して、形容詞類がかかる。

(5) 彼は警察には悪い感情を持っていなかった。

(5)の例は、「感情が悪い」と叙述用法にできないことから、「悪い」は「感情」自体ではなく、感情の内容に対して意味的にかかっており、感情の内容についてどのような感情なのかを表している。

(6) ずいぶん悲しい思い出したが～、

(6)の例も同様に、「悲しい」は「思い」の内容に対して意味的にかかっているが、この場合は、「思い」についてその内容を具体的に説明している。

以上が、形容詞類が名詞の指示対象の意味の一部にかかる場合であるが、一方、名詞の指示対象がおかれていた状況を表すような、名詞の指示対象に外側からかかるような例としては、例えば、次のようなものがある。

(7) 自動車・同部品については、純粋な民間部門のため、両国の隔たりがもっとも大きい。

この例では、「民間部門」の意味特徴とは関係なく、自動車・同部品の民間部門であるあり方が100%であることを、「純粋な」が表している。(7)の場合の「純粋な」と「民間部門」との二者関係には、「純粋に民間部門である」という意味関係がみられる。このようなタイプは、意味的に名詞の指示対象の内的な意味特徴を修飾するのではなく、形容詞類と名詞との二者関係において、名詞に続く用言を形容詞類の意味的なかき先として想

定できることから、連体修飾にみられる「連用的意味」と呼ぶことにして、本稿でとりあげ分析している。

4 連用的意味をもつ形容詞類と名詞との意味関係

連体用法の形容詞類が連用的な意味を表す場合、形容詞類は名詞の指示対象をどのように捉え、何を表しているのかについて分析する。

形容詞類の連用的な意味を表す場合について、六つのタイプをあげる。ここで、Nは被修飾語の名詞、Adjは修飾語の形容詞類を表すことにする。

(I) 形容詞類は、「文脈中の主体が『名詞の指示対象』として存在する」そのあり方を表す。

形容詞類と名詞との意味関係は、

「Adj + N ⇒ Adj (連用形) + Nである」

(8) 農産物は完全な消費財であり、製造工業の原料として使われることはない。

(8)の「完全な消費財」には「完全に消費財である」という意味関係がみられる。「完全な」は、消費財というものに言及しているのではなく、「農産物が消費財である」そのあり方が100%であることを表す。前述の例の(2)や(7)の例文においても、「イリオモテボタルがホタル科であること」「自動車・同部品が民間部門であること」のそのあり方について、形容詞類が表している。

(II) 形容詞類が「名詞の指示対象」としての成立の仕方について表す。

形容詞類と名詞との意味関係は、

「Adj + N ⇒ Adj (連用形) + Nである」

(9) 純粋な中立は難しい。

(10) 構造協議が、日米間の単なる協議から、これまでに例をみない、きわめて重要な協議に変質したのは、このときからだったと言われている。

(9)、(10)の例は、形容詞類と名詞との意味関係には、「純粋に中立である」、「単に協議である」という意味関係がみられる。例えば、(9)の場合、純粋な中立でな

ければ、厳密な意味での中立ではないのだが、「中立」としての成立にある程度の許容範囲をもっているので、純粋ではなくても「中立」の類が存在する。「純粋な中立」の場合の「純粋な」は、「中立」として100%で成立していると考えられる。(10)も同様に、「単なる」は「協議」として、その要素だけで成立しており、単に協議でなくても協議であることが認識されている。このタイプの場合、形容詞類は、「中立」としての成立や「協議」としての成立の十分さなどの、成立の許容範囲の中での位置づけを規定しているので、例文から「純粋な」「単なる」ととると、例文の文脈では成り立たなくなる。

次の(III)のタイプも同様に形容詞類は「成立」を表しているが、名詞の指示対象への意味的なかかり方が異なる。

(III) 形容詞類が「名詞の指示対象」の成立それ自体を表すもの。

形容詞類と名詞との意味関係は、

「Adj + N ⇒ Adj (連用形) + Nである」

(11) 完全な 無人の館なのである。

(12) この海山がさらに隆起したり、前述のように海面低下で海上に顔を出したりすれば、立派な 島になる。

(11)の例では、「完全な無人の館」は、「完全に無人の館である」という意味関係がみられ、無人の館として成立していることを表す。また(12)の例の「立派な島になる」は、「立派に島になる」という意味関係がみられ、こちらも、「島」としての要素を十分に満たして成立していることを表す。

これらの例が(II)のタイプと異なるのは、名詞の指示対象の成立に、許容範囲がみられないことである。例えば、完全な無人の館でなければ、「無人の館」ではない。また、海面に顔を出した山が立派な島だと認識されなければ、それは、まだ「島」ではない。(11)、(12)の例文は、「完全な」や「立派な」がなくても、意味が変わらない。これらの形容詞類は、強調するような役割として名詞の指示対象に意味をそえているのであり、名詞の指示対象自身やその成立の仕方を意味的な事柄で規定しているわけではないからである。

(IV) 形容詞類は、名詞の指示対象の存在の仕方を表す。

形容詞類と名詞との意味関係は、

「Adj + N ⇒ Adj (連用形) + Nがある／いる」

(13) 壁に たくさんの 「拓土」の写真が貼ってあり、～

(14) 多少の ウイットに富んだ会話術や～

(13)は「たくさん写真がある」、(14)は「多少ウイットがある」のような意味関係になる。「たくさんの」「多少の」は名詞の指示対象の存在の仕方を表すと考えられる。

存在の仕方を表すという点では(I)のタイプも同様であるが、例えば、(I)の(8)の例では「完全な」は農産物が消費財であるそのあり方を表しており、「農産物」という枠組みの中での消費財としてのあり方を表す。一方、(IV)のタイプは、文脈中の主体についてという枠組みはなく、単に名詞の指示対象がどのように存在しているかを表している。

(V) 形容詞類は、「『名詞の指示対象』である／をすること」がどのようなことであるかを表す。

形容詞類と名詞との意味関係は、

「Adj + N ⇒ 『Nであること = Adj なこと』」
という意味関係を示す。

(15) 国務長官在任当時のシュルツにとってLICとは、取り組まなければならない眼前の具体的な紛争であった。

(16) このことに格別の異論を唱える人は、まずいないであろう。

(17) 雑談の合間にぼつりぼつりとうまく出てくる、といったかたちで言葉になるのが、本当の感想であって、下手な 感想表明は豊饒な余韻を殺す行為である。

たとえば、(15)の「具体的な紛争」が表すものは、「紛争が具体的である」ということではなく、「紛争ということが具体的な事柄である」ということであり、(16)の「格別の異論」では、「異論が格別である」ということではなく、「異論があること」が格別なことであると

いう意味関係になる。また、(17)では、感想表明の内容が下手なのではなく、「感想表明すること」が下手なことであるという意味関係である。

(VI) 形容詞類は、「『名詞の指示対象』のこと」について表す。

形容詞類と名詞との意味関係は、

「Adj + N ⇒ Adj (連用形) NのことをVする」

(18) 日本の政、財界の細かな人脈まで知り尽くした上で、こちらが何かを言うと、実例や資料を駆使して反論してきた。

この例では「人脈」が細かいのではなく、「細かく人脈のことを知り尽くしている」ということを表す。共起する名詞よりもむしろ動詞との関連性がみられる例である。

5 終わりに

連体修飾関係でのみ成立する形容詞類と名詞との意味関係において、形容詞類が名詞の指示対象のもつ意味特徴にかかる場合と、名詞の指示対象のおかれている状況など外側からかかる場合とがある。形容詞類が名詞の指示対象のもつ意味特徴にかかる場合は、名詞の指示対象の意味特徴の一部にかかるもの、あるいは名詞の指示対象の内容にかかるものであり、これらは、名詞の指示対象それ自体を対象にする叙述用法では表せない。また、形容詞類が名詞の指示対象をめぐる状況など外的な事柄を表す場合があり、その場合、形容詞類は意味的には、名詞の指示対象の内的な意味特徴にかからないことから、「連用的な意味」として分析し、六つのタイプを得た。

(I)、(IV)は名詞の指示対象の存在の仕方を表す場合である。(I)のタイプの場合は、文脈の枠組みの中での名詞の指示対象の存在の仕方である。(IV)のタイプの場合は、数量など、特に文脈の枠組みとは関係なく、名詞の指示対象の存在の仕方を表す。

(II)、(III)は名詞の指示対象の成立について表すものである。(II)は名詞の指示対象の成立の仕方を表すが、(III)は名詞の指示対象の成立それ自体について表している。

(V)のタイプの形容詞類は、文脈の中で「名詞の指示対象」であるとはどのようなことを表し、(VI)のタ

イプの形容詞類は「名詞の指示対象のことについて」表しており、述語となる動詞と関係が深い。

以上が連体用法の形容詞類にみられる連用的な意味として分析されたものである。今後、連用的な意味が連体用法で表される場合の表現は何か、なぜ、連体用法でも連用用法でも可能なのかを考察していく必要がある。このような名詞との意味関係は、形容詞類の語の意味にも、程度の差はあれ影響があると考えられる。例えば、「立派な」は、「立派な人」のように叙述用法に転換できる場合と(12)の「海山は～立派な島になる」のように、名詞の指示対象の成立自体について表す場合とでは意味が異なる。また一見、語の表す意味が同じようでも、そのかかり先によって類義関係も異なってくる。例えば、「完全な」を例にとると、「完全な中立は難しい」では「純粋な中立は難しい」としても意味が変わらないことから「純粋な」と類義関係を結べるが、「完全な無人の館」では、「純粋な無人の館」とはならず「純粋な」と類義関係を結べない。このように、形容詞類のかかり先を求めることによって語の意味を分析すると、多義とまではいかない微妙な意味の違いも分析できるのではないかと考える。辞書の語義記述や類義関係の語のネットワークをより確実につくるには、語の意味や類義関係を記述するのにとどまらず、それぞれの語の意味を実現させるための条件をもとめる必要があると考える。

参考文献

- [神崎 1997] 神崎 享子. 連体修飾関係を結ぶ形容詞類と名詞, 計量国語学, 21-2, 1997.
- [寺村 1991] 寺村 秀夫. 日本語のシンタクスと意味 III, くろしお出版, 1991.
- [森田 1989] 森田 良行. 基礎日本語辞典, 角川書店, 1989.
- [高橋 1994] 高橋 太郎. 動詞の研究 — 動詞の動詞らしさの発展と消失 —, むぎ書房, 1994.
- [佐久間 1967] 佐久間 鼎. 日本的表現の言語科学, 恒星社厚生閣, 1967.
- [橋本 1992] 橋本 三奈子, 青山 文啓. 形容詞の三つの用法: 終止、連体、連用, 計量国語学, 18-5, 1992.